

信濃 86.8.17

第三種郵便物認可

文革20年後の中国

中嶋 嶺雄
(下)

ちょうど十年前の毛沢東の死とそれに続く北京政変、つまり毛沢東側近の江青夫人ら「四人組」逮捕という衝撃的なドラマによってしか、結局は「毛沢東思想」の呪縛(じゆばく)から解き放たれ得なかつた中国は、やがて毛沢東後継者の華国鋒とその勢力を失墜させた八〇年代初頭以来、社会全体の急速な非毛沢化に向けて走りはじめた。毛沢東モデルの象徴的な存在であり、中国全土の生産と生活の基盤でもあった人民公社は一挙に崩壊し、いまやその影もなくなつてしまった。生産請負制による経済の活性化と

対外「開放」は、こうして鄧小平改革の二つの柱になつてゐるのだが、ひとたび「毛沢東思想」の禁欲から解放された中国社会には、今日、その反動としての拝金主義(向錢看)の風潮や不正の風がはびこつてゐる。そうしたなかで、幹部の特権化や官僚主義といった社会主義社会特有の弊害が目立ち、経済の先行きにもなお暗雲が漂つてゐる。

ここに鄧小平以後への不安もあるのだが、「閉ざされた中国」から「開かれた中国」への本格的な離陸を開始した中国は、もはやポイント・オ

ブ・ノー・リターンを通過したのであつて、今後その潮流が右へ左へと蛇行することはないからである。この点で、文革の悲劇を身をもって体験した中国知識人の一人、林秀峰氏(元湖南師範学院副教授)が、「文革の

だが、今日の中国が経済改革、とくに対外「開放」に力を注ぐことも、社会的には、工業業の近代化のほか

力をもつて強めることにもなりかねないからである。この点で、文革の悲劇を身をもって体験した中国知識人の一人、林秀峰氏(元湖南師範学院副教授)が、「文革の

だが、今日の中国が経済改革、とくに対外「開放」に力を注ぐことも、社会的には、工業業の近代化のほか

きしむ、政治と文化

許容か抑圧か、行方注目

政治的な「開放」——いわゆる自由化や西側化は、いまだ一人当たりGNP二五〇〇三〇〇ドルという段階では本来的に望めないとしても——を伴わないかぎり、社会全体の活性化にはなり得ない。当面の経済改革の行き詰まりが、かえつて保守的な潮流の

政治の近代化、すなわち民主化の実現が不可欠だろ(本紙本年五月十一日付「文革の回想△△」)と述べていた言葉は、切実である。

この点で、文革の悲劇を身をもって体験した中国知識人の一人、林秀峰氏(元湖南師範学院副教授)が、「文革の

だが、今日の中国が経済改革、とくに対外「開放」に力を注ぐことも、社会的には、工業業の近代化のほか

力をもつて強めることにもなりかねないからである。この点で、文革の悲劇を身をもって体験した中国知識人の一人、林秀峰氏(元湖南師範学院副教授)が、「文革の

最近の中国における様々な文化現象は、このような方向性を、明と暗の混在として示している。いま少し具体的に述べてみよう。昨年八月末、中国共産党機関紙「人民日報」が、三〇年代に郭沫若らとともに活躍し、魯迅とも親しかった著名な作家で第二次大戦末期にスマトラで餓死の跡を遺した亡き郁達夫にかんして、革命からの脱走者だといわんばかりの従来の評価を改めたことは、きわめて注目すべきニュースであつた。郁達夫こそ、現代中国の光と

影とともに背負つたすぐれた作家だつたからである。ところが、本年二月から三月にかけては、「三里湾」の趙樹理家、琼瑶や三毛らの恋愛小説、青春小説が大流行だといふ(本紙本年七月十八日夕刊)。

このような状況に直面して党中央では鄧小平——胡耀邦ラインのプリンクを、胡啓立・中央黨務書記、ア一百周年記念大会での「現代中国の労働者階級の歴史的使命」と題する演説でマルクス主義の教義のなかの時代遅れの部分、誤つた部分からの訣別を唱へてゐる。他方、

「社会主義社会でも例外は存在する」という大胆な論文を書いたがゆえに「人民日報」副編集長の職を追われた理論家・王若水は、去る七月中旬にも上海「文匯報」に「マルクス主義の人間哲学について」と題する論文を発表して



文化

文化

文化

文化

文化

文化